

第4段階 ガリラヤの大宣教

D. イエスがガリラヤに戻った後も、重大な安息日論争は続く

3. イエスはガリラヤ湖に退き、そこで宣教する

デイリーゼーザスニュース #066

ベーステキスト: MK 3.7-12 (並行テキスト : マタイ12.15-21)

7^{MT}以来 彼は彼を殺そうとしていることを知っていた、^Mイエスは弟子たちと共に湖の方へ退かれた。するとガリラヤから来た大勢の群衆が従った。8 イエスが続けておられたすべてのことを人々は聞いて、ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こうの地方、ティルスとシドンの付近の地方からも大勢の人がイエスのもとにやって来て、^Iイエスは彼らの病人をみな癒された。

900^口座 イエスは、群衆が押し寄せて来ないように、弟子たちに小舟を用意するように命じました。10 イエスは多くの人を癒されたので、病に苦しむ人々が押し寄せてイエスに触れようとした。

11 汚れた霊どもはイエスを見ると、みなイエスの前にひれ伏して、「あなたは神の子です」と叫んだ。12 しかし彼は、自分の身元を人々に知らせないようにと厳しく命じた。

^{MT}このすべては、預言者イザヤを通して語られたことが成就するために起こったのです。

「これは私が選んだ僕である。

私が愛し、私が喜ぶ人。

わたしはわたしの霊を彼の上に置く。

そして彼は諸国民に正義を宣言するであろう。

彼は争ったり叫んだりしない。

路上で彼の声を聞く者は誰もいないだろう。

彼は傷ついた葦さえも折らない。

そして彼はくすぶっている灯心を消すこともしない

正義を貫き勝利に導くまで。

そして諸国民は彼の名に希望を置くであろう。」 (イザヤ42:1-4)

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク = ^M、ルーカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書の書を識別します。さらに、*イエスの言葉は赤の斜体で表記されています*。旧約聖書からの引用は大文字で表記されています。

コンテキストダイジェスト

位置	ガリラヤ湖畔
タイムライン	西暦31年4月 (第15月)
イエスの生涯	第4段階: ガリラヤの大宣教

第4段階 ガリラヤの大宣教

	D. イエスがガリラヤに戻っても、重大な安息日論争は続く
タイトル	3. イエスはガリラヤ湖に退き、そこで宣教する

コメント：

イエスが安息日に癒しの働きを続けたことによって引き起こされた危機は、2つの異なる結果をもたらしました。パリサイ人や他の市民指導者にとって、イエスを滅ぼすという決定は確定し、イエスに対する彼らの反対はその後2年間強まるばかりでした。一方、イエスは彼らの拒絶が決定的であることを知っていたので、ガリラヤ湖に退き、そこに集まった大勢の群衆に働きかけました。

最初、群衆はガリラヤ周辺の人々で構成されていました。しかし、イエスが湖畔で宣教しているという噂が広まると、エルサレムやユダヤから遠く離れたユダヤ人、イドマヤ、ティルス、シドンから異邦人が集まりました。ギリシャ語の動詞時制は、イエスがここで長期間、少なくとも数日間、おそらく一週間以上宣教していたことを示しています。イエスは神の王国の良い知らせを宣べ伝え、自分に触れる者すべてを癒し、多くの悪霊を追い出しました。

この場面はイエスの謙遜さと柔和さを強調しています。敵の憎しみがイエスを殺そうとするほどに高まったとき、イエスは彼らから身を引いて反撃しませんでした。イエスは口論したり、自己防衛のために声を荒らげたり、彼らを非難して彼らの偽善と罪深さを暴露したりしませんでした。イエスは神の力と全知の力で武装していたので、公の裁きで彼らを滅ぼすこともできましたし、そうすることで正義を貫くこともできました。その代わりに、イエスの愛と恵みは彼らに対する忍耐として表れました。それでイエスは身を引いたのです。

イエスは静かでした。彼はいかなる形でも自分を売り込むようなことはしませんでした。彼は認められようともせず、いかなる個人や団体からも好意を得ようともせず、奉仕に対して報酬も求めませんでした。彼は自由に説教し、奉仕し、何の条件もつけずにすべてを捧げました。奉仕における彼の謙虚さと心の純粋さは、このような箇所から見れば驚くべきものです。

私たちはイエスの模範を見ることができます。イエスは可能な限り平和を保っていました。私たちも同じようにすべきです。

また、これは福音書の中でイエスが群衆の前で大規模な奇跡を起こしたことが4番目に言及されている点にも注目すべきです。福音書にはイエスの35の特定の奇跡が含まれています。私たちはDJNを読みながらそれらを追跡しています。さらに、イエスが群衆の中で不特定の大勢の人々を癒したことについての言及が多数あります。私たちはDJNでこれらも指摘します。最初の4つはDJN #033、#054、#055、そしてこの1つ (#066) にあります。これらの言及は、35の特定の奇跡の場面がイエスが実際に行ったすべての奇跡の氷山の一角に過ぎないことを示しています。

マタイは、この宣教期間がイザヤ書 42 章 1-4 節の救世主に関する預言の成就であると見ました。これはいくつかの理由で重要です。

第4段階 ガリラヤの大宣教

まず、御父が御子の浸礼をはっきりと告げる声を発したとき、まさにこの聖句からの言葉を使いました。

「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である…」浸礼のときに鳩の形で見えた聖霊の油注ぎは、今や、イエスの癒しの奇跡の絶え間ない流れ、教えと説教として現れました。「諸国」、つまり異邦人の中から来た人々は、イエスの名に信仰と希望を置き、救いを受けていました。

この宣教の場面は、イエスが安息日にエルサレムで主張したとおり（ヨハネ5:16-46）、パリサイ人との激しい論争の季節の始まりとなった、イエスに関する聖書の証言の代表的な成就でした。

マタイのイザヤ書の引用が示すように、イエスはユダヤ人と異邦人を問わずすべての人に奉仕したとき、救世主としての召命を果たしていました。イエスがいつも行っていたのは、安息日を含めて毎日でした。このことから、イエスが安息日に「働いた」とき（これがこの論争の源）、イエスはいつも行っていたことを行っていたことがわかります。つまり、イエスの奉仕を正確に予言した聖書を忠実に実現していたのです。

イエスは、敵を怒らせるためだけに安息日に奇跡的な治癒を行ったことはありません。イエスは敵を怒らせるためだけに治癒を行ったわけではありません。イエスには敵の前で治癒を行う力があったからです。イエスが安息日に治癒を行ったのは、イエスが敵に与えた理由のためです。イエスはすべての点で父と一体であり、神は決して神であることから休むことはないからです。

イエスは誰とも喧嘩をしませんでした。ただ、毎日、すべての人を公平に愛したのです。それが神の行為です。

応用：

この長い宣教の場面は、イエスの態度と、イエスを殺そうと決めた人々の態度との非常に強い対比を私たちに示しています。主がすべての人に対して示した一貫した愛、聖書に明らかにされている父の御心に対する忠実さ、そして御業を遂行する際の父との絶え間ない交わりは、私たち一人ひとりが見習うべき輝かしい模範です。

イエスが父と共に愛をもって歩むことを妨げられるものは何もありません。イエスは、その見事なやり方で「敵を愛する」方法を私たちに示してくださいました。

敵との「安息日の論争」のこの時期におけるイエスの具体的な行動や態度のうち、特にあなたにとって印象深いものは何ですか。

あなたはイエスに従って、同じ行動をとるにはどうすればよいでしょうか。